

# オボの造営に関する基礎的諸考察

— ウジムチン地域の事例を中心に —

Fundamental Remarks on the Structure Obo:

A Case Study of the Region of Ujumchin in Inner Mongolia

ボルジギン・オルトナスト

Borjigin URTNAST

**要旨** モンゴルの遊牧民はそれぞれの地域において神聖視された山または小高い丘や湖のほとりに石・樹木等を円錐型に積み重ねたオボという造営物を作って、毎年定期的に祭りを催す。それはオボ祭りと呼ばれ、遊牧共同体の繁栄、家畜の繁殖等を祈願する宗教的行事でもある。オボは土地の神の依代として信じられ、遊牧民の自然観と世界観とが凝縮されている。現在でもモンゴル遊牧地域における遊牧共同体が各々のオボを所有しており、オボ祭りは集団的アイデンティティの確認または強化の重要なメカニズムとして表象されている。オボの形態と祭祀は地域によって多少異なるが、テンゲル（天神）やガジル（地神）を祭る宗教行事として、またより具体的にはノタグ（共同体の所有地）の神の祭祀として認知されている点で共通している。オボ祭りにはブフ（モンゴル相撲）、競馬などの伝統技が奉納され、伝統文化の伝承母体ともなっており、現代化が進む今日において注目に値する祭祀文化であろう。本稿はオボの造営、つまり構造を現地調査に基づいて分析するものである。

## 1 はじめに

オボ（obuy-a）とは、「モンゴル、新疆、チベットの地域に広く分布している一種の建造物で、形式には礫石あるいは塊石を一つの円錐形に積み上げた簡単なものから、礫石、塊石で立派な円壇を築き」[江上 1956:163]多数の細柳を挿入し、中心に宝珠柱を立てた建造物である。モンゴルにおけるオボは遊牧民のそれぞれの居住地域において神聖視される山上、丘陵、湖辺、路傍、砂漠の中などに築かれ毎年決まった時期に祭祀が催され人々の信仰の対象になっている。筆者は2004年6月14日から2004年8月14日までの間、内モンゴル自治区シリング盟、西ウジムチン旗<sup>①</sup>と東ウジムチン旗でモンゴルの伝統的祭祀文化であるオボ祭りに関する集中調査<sup>②</sup>を行った。近年の草原生態の激変に伴い遊牧文化の衰退が顕著であるにも関わらず、モンゴルの各地でオボ祭りが盛んに行われている。オボ祭りは牧畜儀礼と深い関わりを持つ遊牧民の伝統的行事であるが故、そこにモンゴル人の世界観が大いに反映されている。

オボ<sup>③</sup>の起源に関して「モンゴル古代のシャーマニズムの祭祀文化から起因を持ち、古い宗教のもとで形成された祭りである」[Qurčabayator. L 1991:265] や「元来オボは天地の神霊の拠るところとして、シャーマニズム信仰に根源をもつ一種の聖処である。したがってオボはシャーマンの判定によって神霊の降臨の場所あるいは神霊の棲住の場所とされた地点に造営され、それに三叉矛あるいは槍の類が建てられているもの、天神地神がそれによって上下交通するためといわれている」[江上 1956:163]と指摘されている。従ってオボ祭りは、オボの造営、オボの祭祀、オボの神楽といった三つの内容から構成されている。各内容は綿密

な秩序や仕来りのもとで営まれる。

オボアの構造の仕組みは、台座、大オボア、ジャラー（生木）、オルガ（枯木）、ジェル（注連縄）、ショルグシン・モド（宝珠柱）、ドグ（擬宝珠）、祭壇、小オボアなどから成る〔写真1, 2〕。しかし、すべてのオボアの構造は一様ではない。現在のオボアは自然の石や煉瓦が主な材料となって円錐状に造られている。写真1は、シリンホト市<sup>④</sup>の北側に位置する2004年に復活されたエルデニ・オボア<sup>⑤</sup>の様子である。オボアの祭祀は、祭具配列、オボアへの登壇、念誦奉納、供養儀礼などによって進行される。祭り後には主に長距離競馬やモンゴル相撲などの伝統競技が奉納される。参拝者が祖先伝来のオボアに登拝し供物を捧げ、願いをかけることによって、肉体的精神的疲労困憊が癒され、聖なる力を感得し、人々の生活に聖性が付与される。「富士山が日本人のアイデンティティの場とされている<sup>⑥</sup>」と同様、オボアも正しく遊牧民のアイデンティティの場であり、精神世界の象徴でもある。本稿では、現地で集中調査実施し得た情報や資料に基づき、主にオボアの造営過程、即ちオボアの構造に焦点を当てそのメカニズムを理論的に分析することを試みる。オボアは遊牧民の古来継承されてきた文化的遺産であり、遊牧民の精神と融合し具体的に合体されている草原のシンボル・マークである。

## 2 オボアの造営

「モンゴル高原の人々は、古くから山や丘の頂に盛り上がるように残った自然石を「オボ」と呼び、天神の降臨する聖域の概念をもっていた。そしていつの間にか、方位の吉凶によって居住地の山や丘の頂に石を積み重ねたり、有力者の狩猟などの記念に石を積み、その堆石をオボと呼び、天神の降臨する所とした」〔森田 1986:58-59〕。こうしたことから窺えるのは、初期時代のオボアの造営は山上の自然の盛り上がった石、あるいは部族の記念すべき祭祀、もしくは祭儀の際に、山や丘の上に石を積み神霊の降臨する聖域としていたことが推測される。

「祭祀が営まれているオボアの造営は、初期時代の簡素な祭壇のように石などを取り集めてできたが後に時代の流れと宗教の影響を受けてから、オボアを造営することが様々な内容を組み入れ、明白な手順を踏むようになった」〔Qu yuan 2002:12〕と最近の研究で指摘されている。従ってシャーマニズムの前の、即ちオボアの発生の初期段階人々は石や樹木などを取り集めオボアを造営していたことが、単なる天地に祭祀を行なうための祭壇が目的であり、その時のオボアを造営する仕来りは簡素でそれほど明白な慣行はなかった。時代の推移と人々の認識の深まりに伴い、シャーマニズムの影響を受けつつかつての祭祀を営むオボアにも変容が生じ、居住地の人々にとって守護霊が宿る神聖な場所と認知されるようになった。そのため新たなオボアを造営する際、かつてのような簡素な取り集めを行う行為を避け、明白な仕来りや詳細な慣行を踏むことになる。そうして次第にオボアを造営する慣行が複雑になって行くのである。

### 2-1 地勢選定

ここでいう地勢は地形や地相と共通する概念を有し、特にモンゴル人のオボアを造営する際、その土地の形勢を観察し場所を判断する基準の一つと考えられる。オボアはいつでも誰にも気に入られる場所に造営することはできない。そのように勝手に造営されたオボアは逆に造営した人やその辺の人々、家畜に危害を及ぼすとされる。従ってオボアの造営される場所はラマ僧

及び、その土地に長く生業をいとなんだ長老の判断で行われる。「オボアを造営する前、地勢に綿密な観察を行い、地相を占う典籍や伝統的知識に基づいてオボアを造営する場所を決める」[Sayinčoytu. W 2004:235]。

昔「オボアはシャーマンの判定によって神霊の降臨の場所あるいは神霊の棲住の場所とされた地点に造営される」[江上 1956:163]。従って「特に16世紀から仏教がモンゴル社会に浸透し、これまでの宗教であったシャーマニズムに取って代わり、昔から継承されてきたオボアの慣行に大きな影響を及ぼすことになる。オボアを造営する地勢選定はラマ僧の立ち合いのもとで行われることが普遍的となり、その選定された場所に三日も前からラマ僧を招き、地域の神々にオボアの場所を譲ってもらうための念経が行われていた」[Sayinjiryal 2001:446]。こうしてオボアの造営される場所は時代の推移によって、様々な歴史的文化背景のもとで執り行われていたことが窺える。「地勢を多くの象徴的物体の形状を象って観察することはモンゴル人の地勢観の伝承の独自の特徴である」[Sayinčoytu. W 2004:110]。このような象徴的物体には、椅子、皿、箕、五徳、柱、鎧、鞍、金敷(金床)、帳などが挙げられる[Sayinčoytu. W 2004:110-118]。

筆者が調査したオボアの中に「トラガ・オボア」というオボアがある。「トラガ」とは「五徳」を意味する。そしてこのオボアの起源にまつわる興味深い伝承が現地の人々の間に伝承されている。昔、チンギス・ハーンは遠征の最中、今のトラガ・オボアが位置する所に駐屯し兵隊を休ませたという。そして五徳を置いてチンギス・ハーンに料理を作った場所を記念するため、そこにオボアを造営したのが、今の「トラガ・オボア」の由来であると地元の人々は誇らしげに語っている。

地勢選定は、オボアを造営する上で最も重要な一歩であり最初の作業でもある。ウジムチン地域でオボアに関する集中調査を通して、殆どのオボアの位置する地勢は、その地域において際立って良い景勝地であることが分かった。例えば、西ウジムチン旗を代表するバヤン・ホシヨール・オボア〔表2参照〕が位置する山に登れば、半径100km先の眺めが広がり、西ウジムチンの草原を一望できる。そしてオボアが位置する山の麓に川が流れ、オボアの周りに湖があちらこちらに点在する。遊牧民にとって川と湖は命を育む水源でもある。「モンゴルに点在するオボアの地勢の特徴は、まず神聖な土地が重視される。即ち、モンゴル人に聖山、聖湖、聖泉とされる所にオボアが造営される。次にラマ寺院の境内及びその周辺にオボアが造営される。そして、牧地における形勝の地にオボアが造営される」[後藤 1956:49]。「景観の中で特に神聖性が感じられる場所は、聖なる空間とされ、やがてその一部に建物が建てられるようになる。そしてこの建物が神の館、儀礼の場とされる」[宮家 1995(1989):226]。モンゴルの草原における景観の良い場所にはいうまでもなくオボアが造営され、牧民たちの信仰の対象となり、聖なる儀礼の場となるのである。

## 2-2 地鎮儀礼

オボアの造営に先立って、その土地を聖化したり、地霊を鎮めまつる、シュンシグ・ダラフ(süngšiy daraqu)という地鎮儀礼が行なわれる。シュンシグ・ダラフとは、一種の「地祭」(地鎮祭)と考えられる。日本の建築儀礼における「地祭」には「清い山や海の土砂を盛って神霊に祈りをこめたり、大黒柱を建てる大地の地搗きをし、礎石を置くなどのことが行われる。この地搗きにはじまる建築の一連の仕事はかつては大工の指導の下に村人が共同で行ったので

ある」[宮家 1995(1989):295]。しかし、オボーを造営するときの地鎮儀礼は、まず、地面を掘り起こし、オボーン・ダルラガ(obuyan daruly-a)という鎮め物をそこに埋めることを指す。「地鎮儀礼は一種の入魂儀礼であり、再生の形式でもある」[Sayinçoytu. W 1998:419]。現行の鎮め物には、ラマ僧によって念経してもらった五穀(米、麦、粟、豆、黍)やマライン・ヘシグ<sup>⑦</sup>(mal-un keşig、家畜の恵み)と呼ばれる家畜の毛や乳製品、仏教の護符のついた布切れなどを壺に入れて地面に埋める。しかしオボーによって鎮め物に異なるところも見られる。「オールドス地域のオトグ旗のウルゲイン・オラーン・オボーを造営する際、活仏トゴワ氏が金銀の馬蹄銀、銀糸の布、瑪瑙、栗毛の馬に乗った仏像などに念経を行い地面に埋めたという」[Arbinbayar, Sunum 2001:8]。「バーリン地方におけるオボーの鎮め物には、九つの穀物の種、赤銅、銅、銀貨、珊瑚、真珠、瑪瑙、トルコ石等を壺に入れて密封し地面に埋める」[Sayinçoytu. W 1998:438]。これを見ると地霊を鎮め、特にオボーの宝珠柱を建てる地点に霊力を込めていることが注目される。こうした地鎮儀礼によって、オボーに魂が注ぎ込まれ、神霊が宿するという考え方は遊牧民のオボー信仰上に定着した観念である。逆に、地鎮儀礼が行われていないオボーのことをエジンガイ・オボー(ejen ügei obuy-a、守護神のないオボー)、アミガイ・オボー(ami ügei obuy-a、魂のないオボー)とされ、そのようなオボーに赴くことが敬遠される。「地鎮儀礼のとき、オボーの下に穀類の種を埋めることは、穀類には豊穰性があるので、これをもって生命の繁殖を象徴しているのである。アルツなどの香草を埋めることは、アルツは常緑草なので、これをもって生命の永続性を象徴しているのである」[Sayinçoytu. W 2004:38]。「米やそこにひそむとされる穀霊は人間に活力をもたらす主要な根源とされていた」[宮家 1995(1989):305]。オボーの下に穀類などを埋めることは正に穀霊が集約的に宿る聖なる空間を演出しオボーに超自然的な力が齎される。このように地鎮儀礼は俗なる場所に、神霊を祭る聖なる場所を作るための営みである。そこでオボー全体が聖なるコスモスと捉えられ、祭りを通して聖性が付与されるのである。

### 2-3 構造仕組

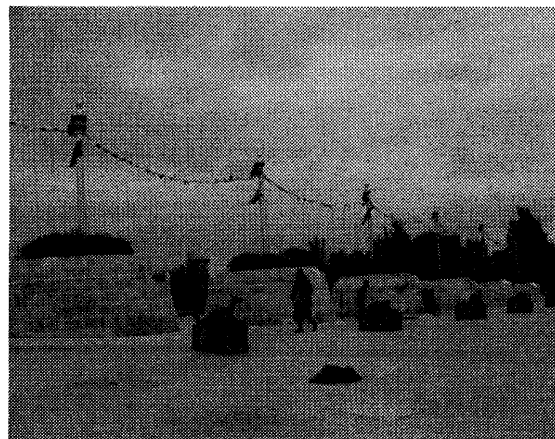
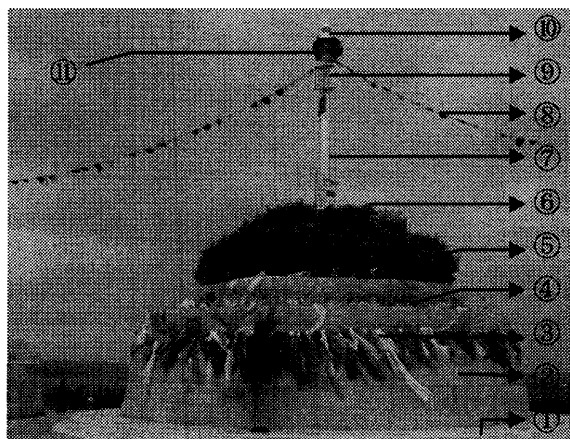


写真1 エルデニ・オボー(大オボー)

写真2 同オボーの左(東)側の6基の小オボー

- ①台座 ②円錐体 ③ハダグ ④供物 ⑤ジェル・ヒーモリ ⑥若柳の群(群)  
⑦宝珠柱 ⑧ジェル・ヒーモリ ⑨形代 ⑩幢 ⑪擬宝珠



写真3 バヤン・オボ

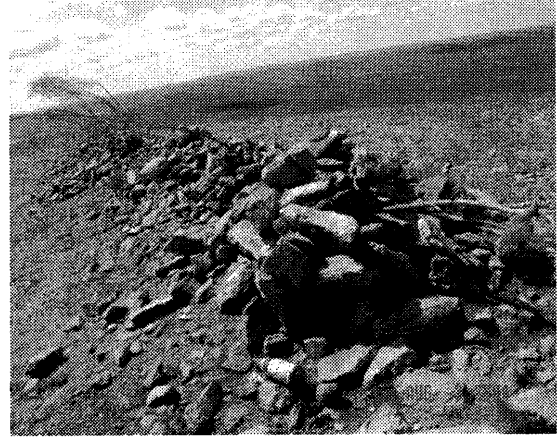


写真4 同オボの右(西)の15基の小オボ

### 2-3-1 台座

台座は大オボを造営するための円形の礎である。ウジムチンのオボの台座は石を平たく積み重ねられてできている。その広さはオボによって異なるが、規模の大きいオボの場合径約5-7m、小規模のオボの場合径約3mである。エルデニ・オボの台座は、大理石を敷いてできている。オボの台座として最も豪華な作りである〔写真1〕。また石の台座の上にセメント（バヤン・ホショー・オボ、バチ・オボ）や土（アドン・オボ）などを塗ってできているオボも見られる。しかしまったく台座を設けず、地面に直接大オボを築くオボも少なくない。

筆者が集中調査を実施したオボの台座の設け方を以下のような三つのパターンにまとめることができる〔表2 大オボの構成特徴を参照〕。

- ① 二層の段の上にオボを造営する事例（エルデニ・オボとバヤン・ホショー・オボの事例）。
- ② 一層の段の上にオボを造営する事例（バチ・オボの事例）。
- ③ 台座を作らず直接地面にオボを造営する事例（ゴルハン・ハン・オボの事例）。

### 2-3-2 大オボ

大オボは一基のオボの構造において、造営と形が最も大きく言えば中心的存在である。大オボの形状は基本的に円錐形（円柱形）である。大オボの中央に宝珠柱を挿入し、その周りに枝のついた細柳を挿入する。また祭りが行なわれているオボの場合、毎年大オボの中央にチュウブン・オスという壺に入れた寄る辺の水を埋める。大オボには造営の工夫、飾りや祭祀の過程も集中されている。毎年のオボ祭りにおいて、大オボを始め、すべての小オボまでに修繕行事が行われる。大オボの造営は外観的に簡素に見られるけれども実は複雑で多様な付属装飾品で構成され複合的造りを持っている。

オボ祭りの際、参拝者がオボの近くの石をもってオボの上に奉納する行為も頻繁に見られる。「オボの堆石は、祭りに訪れる人々が持ち寄って祈願しながら安置したもので、元来、

塚型であった」[森田 1986:58]。「もともと塚状であったオボが清朝以降、円壇の上に石を積んで台とし、その上に大、中、小の三層を築き、重なった円錐体状の造営をとるようになった」[佐野 1988:289]。「オボの構造は(中略)、円筒形の石積みを二段か三段重ねて築かれるものが一般的なタイプである」[大塚 1984:22]と、大オボの形状や構造に関して先行研究では様々な視点から指摘されている。従ってすべてのオボの造営は一様ではないが、ウジムチン地域に点在するオボは基本的に煉瓦及び石で造営されている。しかしエルデニ・オボの円錐体は、長方形の花岡石を整列的に円錐状に組み上げてできており、筆者が調査を実施したオボの中で、最も現代風に造営されたオボである。実はエルデニ・オボは文化大革命が始まる前の1957年から祭りが停止され酷く破壊を受けた。そして昔のオボの中心地に革命戦争に戦死した共産党の兵士たちの遺骨が埋葬され、その業績を称える記念碑が建たれていた。そして2004年に兵士たちの遺骨と記念碑が他の場所に移され、やっとかつてのエルデニ・オボが姿を現し、2004年の陰暦5月13日に47年ぶりの祭りが催された。市場経済の影響を受け、観光目的で地元の伝統文化を復活させ、それによりできるだけ多くの投資家を誘致するため文化的環境の造成に力を入れたいと市の責任者は語っていた。そのため、今回のエルデニ・オボの復活は、その造営とオボ祭りは意外に壮大であった。筆者の集中調査したオボの造営は下記のような特徴を持っていた。

- ① 人工的に加工された石及び煉瓦を整列的に積み重ね円錐型に造営する事例（エルデニ・オボとバヤン・ホショー・オボの事例）。
- ② 人工的に加工された石及び煉瓦で門のついた円状の囲いを作りその中に、台及び円錐型のオボを造営する複合型の事例（ゴルハン・ハン・オボとトラガ・オボの事例）。
- ③ 自然の石を積み上げて造営する事例（バチ・オボの事例）。
- ④ 自然の石を積み上げ、その外側を粘土やセメントで塗り固め、その上に更に石灰液を塗り付け白色を付着させ造営する事例（アドン・オボの事例）。

### 2-3-3 ジャラー

ジャラー(jalay-a)とは、大オボの上に奉納される枝のついた細柳のことで、言わば一種の生木である。ジャラーのことをウジムチンではオボニ・ボルガス(obuyan-u buryyasu, オボの細柳)とも言う。ジャラーはオボに威風を与え、参拝者がオボの神に聖別するためのオンゴン<sup>®</sup>、護符であるヒーモリなどを結んでおくためにも大きな役割を果たしている。

ジャラーのほかの意味には、モンゴル人の狐の革で作った冬用の帽子の上につける絹の赤い房をジャラーという言葉で表現する。また旗(はた)の先端につける吹き流しのことをも指すことがある。この意味において、「ジャラー」という言葉は、オボ、旗、帽子などの頂上につくもので、その物事の神聖さを強調する意味が含まれている。

「オボの上段には、葉のついた楊樹(ポプラ)の枝を刺す。これは草が生えることを祈願するためだそうである」[森田 1986:62]。オボのジャラーとなる細柳は、その地方において最も豊かなで、家畜の繁殖においても縁起が良いとされる砂地に生える若柳の細枝を刈り取って、それを並べて挿し込む。遠方からはオボの上に細柳が生えているように見える。筆者は調査の中で祭りを数日後に控えているオボに奉納されるジャラーの若柳を刈り取っている二人

の若者と出会って、インタビューすることができた。それぞれオボアの造営される形によって、奉獻される細柳の量及び挿し込まれる配列も異なっている。現地ではオボアの上に細柳を奉獻することは、生命の繁栄を象徴する意味があるという。ジャラーである若柳の奉獻する方法に以下のような三つの特徴が見られる。

- ① 若柳を群状（むらじょう）に奉獻するタイプ（エルデニ・オボアの事例）。
- ② 若柳を束ねて奉獻するタイプ（ホショー・オボアの事例）。
- ③ 若柳を円状囲いの縁の上に並べて奉獻するタイプ（ゴルハン・ハン・オボアの事例）。

#### 2-3-4 宝珠柱

宝珠柱とは、オボアの中央に奉獻される細長い親柱のことを指す。ウジムチン地域ではジガン(jiyan)とも呼ばれている。その形式は様々であり、宝珠柱に塗りつける漆の色も一様ではないことが現地調査で確認された〔写真5, 6, 7〕。宝珠柱であるジガンに塗りつけられている漆の色が大体三つの異なる色であることも観察された。

- ① 宝珠柱に金色を塗りつけるタイプ（エルデニ・オボア、ゴルハン・ハン・オボア、ホショー・オボアの事例）。
- ② 宝珠柱に紫色の漆を塗りつけるタイプ（サグライ・オボア、バヤン・ホショー・オボア、アドン・オボアの事例）。
- ③ 宝珠柱に赤色の漆を塗りつけるタイプ（バヤン・オボアの事例）。
- ④ 宝珠柱に五つの色の漆を等間隔で塗りつけるタイプ（トラガ・オボアの事例）。

上記のまとめは、筆者が現地調査での参与観察を経てまとめたものである。しかし、すべてのオボアに宝珠柱が奉獻されるわけではない。宝珠柱が奉獻されていないオボアも観察された。基本的に規模の大きいオボアには宝珠柱が奉納され、規模の小さいオボア、もしくは新しく修復されていないオボアには宝珠柱が奉納されていない。その地方及びオボアによって、奉獻されている宝珠柱を次年度の祭祀の祭主を務める者が家に持ち帰るという話を現地で耳にした。宝珠柱は上質の木材で作られており、また先端に貴重なドグと呼ばれる擬宝珠が取り付けられているため、オボアの中央にそのままに残して置くと、卑しん坊たちに盗まれる恐れがあるという。筆者が調査していたオボアの中には、祭祀が終えた後も宝珠柱を取って帰らず奉納された状態で置かれているオボアも何基もあった。

大オボアの中央に立てられる宝珠柱の意味と役割においては遊牧民の世界観の表象と深く直結されている。「周知のように建築儀礼の中核をなすのは、大黒柱の柱立てである。こうした柱が日本の民族宗教で重要な役割を果たしていることは、伊勢神宮本殿の床下中央の心御柱（しんのみはしら）が、伊弉諾、伊弉冉二尊が国生みに先立って、ミトノマグワイをした柱に擬せられていることから理解される。この心御柱は各家の大黒柱が世界の中心にあって、天上と地上を結ぶ宇宙木、宇宙軸と考えられるものである」〔宮家 1995(1989):226-227〕。「また中央アジアの遊牧民の間では、柱が須弥山あるいは背骨、その他から吹きつける風は氣息という（中略）」〔宮家 1995(1989):226-227〕ように、オボアはモンゴル人の宇宙であると同時に宇宙

観を演出する神体であると考えられる。この宝珠柱によって「天神地神が上下交通するためといわれている」[江上 1956:163]。オボ一の宝珠柱の神聖な意味を咀嚼するに当り早くも朝鮮半島や満州にける竿木崇拜に関して詳細な観察を行っていた白鳥(1936)の見解が注目に値する。白鳥は「北方民族におけるシャーマン教を見るに、所謂索木なるものあり」[白鳥 1970(1912):504]と提起し、更に「樹木や岩石の崇拜は殆ど世界的であって、極東民族にもこの習慣がある。満洲と朝鮮に竿木崇拜の風習があるのは旅行者の誰しもが認める所であるが、これは生木或いは森林崇拜に起源しているに相違ない。『史記』卷110 匈奴傳で五月大會龍城、祭其先天地鬼神、秋馬肥、大會蹕林とあるのは生木崇拜の古く匈奴に存した證である」と指摘している[白鳥 1970(1936):505]。更に白鳥はこの習慣の起源に関して「小さい種子から鬱蒼と林をなす樹木の發生力の偉大さに驚異を感じた太古の人々は、樹木それ自身を神としたが、後には樹木の何處にその精神——即ちククノチがあるかを考え、樹木から之を遊離せしめ、更に木を神の居る場所だとして、他のスピリットも之に住ひ得ると信じたのであろう」[白鳥 1970(1936):507]と推論を呈した。先学によるこのような卓越した考えに、モンゴルに現存するオボ一の宝珠柱の事例は示唆を与えるものと考えられる。

オボ一祭りの際、この宝珠柱に四方や各小オボ一を結界する注連縄が張られる。注連縄には青、赤、白、黄、緑の絹垂(しで)が垂らされる[写真1]。

### 2-3-5 擬宝珠

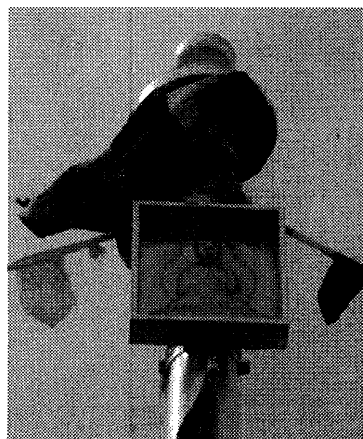


写真5 エルデニ・オボ一の擬宝珠



写真6 サグライ・オボ一の擬宝珠



写真7 トラガ・オボ一の擬宝珠

擬宝珠は、宝珠柱の先端に嵌め込ませている金属製の金具である。これをウジムチン地域ではドグとも言う。しかし、オボ一ごとの擬宝珠が多様な形状に富んでいることが現地調査で確認された[写真5, 6, 7]。

擬宝珠にはどのような意味が託されているのだろうか。西ウジムチン旗のオラーン・ハラガ寺院のラマ僧シャラビル氏(69歳)の話によると、擬宝珠は太陽や月を象徴しているという。従って宝珠柱をオボ一に奉獻する際、かつての加工する前の樹木が太陽に向かって生えていた面を、オボ一に奉獻する際にも同じく太陽に向けて奉納するという話を東ウジムチン旗の新スム<sup>◎</sup>寺院の若手ラマ僧スチンバートル氏(31歳)に聞いた。その話と擬宝珠は太陽や月を象徴する

というシャラビル氏の見解には接点となる共通点が含まれていたことが、興味深く感じられる。即ち、オボーの中央に奉献されている宝珠柱は太陽や月の神、言い換えれば昼と夜の神を象徴していることになる。遊牧民にとって、昼と夜はまた別々の世界である。このように共同の祭祀場であるオボーに太陽や月を象徴する擬宝珠を奉献することによって、遊牧民がもっと大自然の恵みに授かり、安定と繁栄を遂げたいという共通認識が含意されていると考えられる。内モンゴルの他の地域でオボーの調査を行なった日本人研究者にも「太陽と月をあしらった旗竿が頂部にたてられる」[辻 1994:140]という記録が見られることから、擬宝珠が太陽と月を象徴するという意味がより顕著である。

「木は古来神霊が憑依するもの、あるいは宇宙木として崇められ、この神木とされる立木の上部を切って根のついたまま仏像を刻んだ立木観音が造られている。ちなみに、わが国最古の仏像は、光を放った楠の流木に刻まれた吉野寺の放光物である」[宮家 1995(1989):231]。従って、モンゴルの宝珠柱の頂部の擬宝珠には、五色の幢、長方体に形代を納めた額を吊るしたり[写真5]や白いハダグ[写真6]や青いハダグ[写真7]を結んで置くのである。擬宝珠をこのような荘厳具で飾ることによって、宝珠柱に聖性が付加され、神霊の依代になると考えられる。擬宝珠の形状や飾られている幢やハダグはそれぞれ象徴的意味を持っており、それ自体一つの世界観を表わしている。写真5に見る幢(とう)は五色の絹の幕で筒型に包んでたらしめた飾りである。「これら五色には、すべて意味づけがなされている。青は、モンゴル民族のシンボルカラーである。赤は太陽と火のシンボルで、豊饒を表わす。黄はラマ教、白は乳で、清らかなことであり、緑は草原を象徴するものである<sup>⑩</sup>」[大塚 1984:23]。

### 2-3-6 祭壇

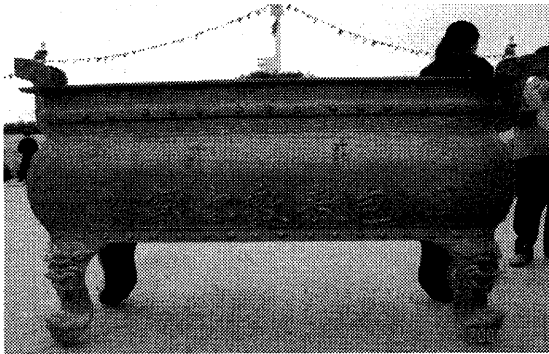


写真8 エルデニ・オボーの香炉

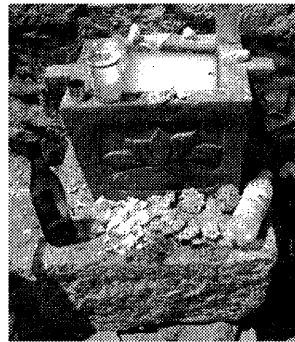


写真9 アラル・オボーの香炉

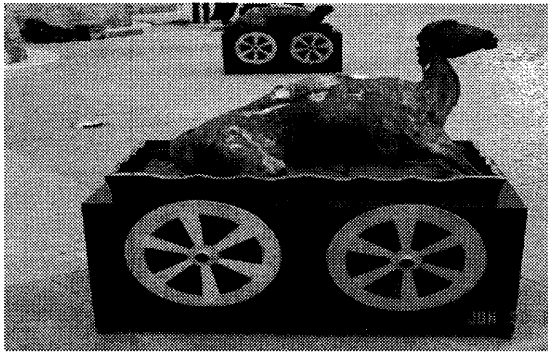


写真10 羊の丸焼きを収めるそば折敷

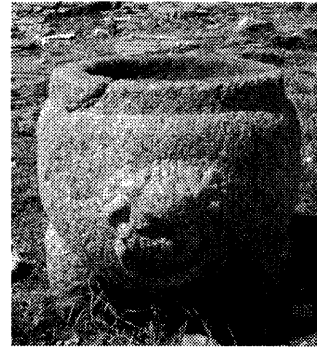
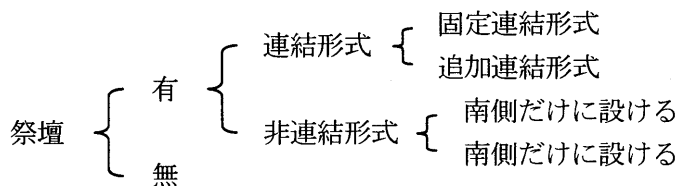


写真11 バヤン・オボの香炉

オボの祭壇は、基本的にオボの南に設置される石の香炉や石台、折敷などからなる付属施設のことを指す。祭祀の当日、招かれてきたラマ僧がそのそばに座り、香をたきオボのサンと呼ばれる経を誦する際、一連の祭具や供物などをその上に並べて置くのが常である〔写真8-11〕。オボの祭壇の形状や設置方式などがオボごとに異なっているのが上記の写真で窺うことができる。祭壇はオボの一つの付属的施設に当たるため、その特徴や構造、設置方式などを合理的に理解し分析するため、筆者は現地で撮影した19基オボの祭壇を比較し検討を試みた。

従って、すべてのオボには予め祭壇を設けるものではない。ウジムチン地域では、祭壇を設けていないオボも数多く見られる。祭壇を設けていないオボの場合、祭祀の当日祭主が、自家用の机などを持ってきてオボの前に準備して置く。招かれてきたラマ僧たちも早速その上に香をたき、祭具などを並べておき、念経し祭祀が始まる。オボの祭祀を寺院が担当する場合、机や香炉などが寺院から提供される。筆者の分析した結果、祭壇を設けるオボのその祭壇の設け方に関して、連結形式と非連結形式という二つの形式が現行されていることが確認された。それを下記のような図式で表示する。

図式1



連結形式祭壇とは、祭壇がオボの本体と繋がっており、ほぼオボと同時に造営された形式を指す。連結形式祭壇の中にまた固定連結形式と追加連結形式の祭壇の存在が確認された。固定連結形式祭壇とはつまり祭壇がオボの本体と繋がって造営されている祭壇のことを指す。そして追加連結形式の祭壇とは、固定連結形式の祭壇に、更に追加する形で色々な祭壇（香炉や石台など）を連続させていく形式のことを指す。非連結形式祭壇とは、祭壇がオボの本体から離れた場所に設けられていることを指す。非連結形式祭壇において、祭壇をオボの南側だけに設けると祭壇をオボの南北両側にそれぞれ設けるという二つのタイプが見られる。エルデニ・オボの祭壇は、南北両側に設けた非連結形式の祭壇である。

2-3-7 ヒーモリ

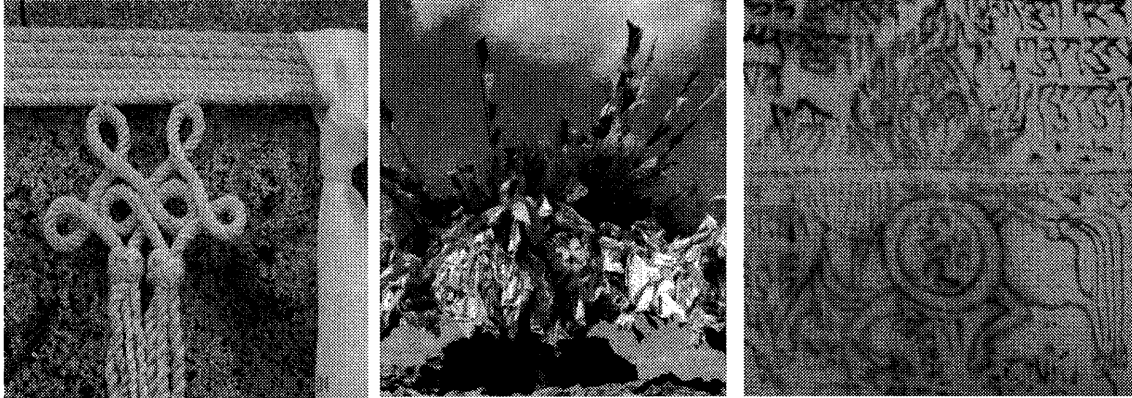


写真 12 オボーの円錐体に巻きつけられている吉祥文の縄  
 写真 13 バヤン・オボーのヒーモリ  
 写真 14 バチ・オボーのヒーモリ

ヒーモリ (keyimori) とは、モンゴル人の精神的及びイデオロギー的意識の基層を形成し表象する記号である。時にその観念が儀礼を伴って具現化され、人々の思考の基底部に新たなエネルギーの源として漲り、新鮮な響きと鼓動を齎すことがある。「ヒー」は「空気」、「モリ」は「馬」を意味し、「気の馬」とも表現される。このことは、ヒーモリは馬と深く関わりを持つことを象徴する一方、遊牧民にとって馬の特別視が強調された表現として認識される。それにしてもモンゴル人の精神生活におけるヒーモリの意味は多義にわたっており、共同体の繁栄までが象徴されている。モンゴル語におけるヒーモリという言葉には、抽象的意味と具体的意味が含意されており、それぞれの意味の射程が異なる。文脈によって、「精神」、「気運」、「繁栄」、「繁盛」、「壮健」、「気性」、「気風」、「意気」、「氣勢」などを表す意味も含蓄される。

オボーのヒーモリとは、オボーを造営し（或いは修復し）祭りの先日及び当日結びつけ四方を結界する注連縄、色鮮やかな幣、紙や絹に印された絵馬などの総体を指す。それらのものがオボーのヒーモリの正体であり、更なる深遠な象徴的意味が託されている。オボーのヒーモリには、ジェル・ヒーモリ (jel-e keyimori)、ブス・ヒーモリ (büs keyimori) そしてチャーソン・ヒーモリ (čayasan keyimori) といった三種類あることが現地調査で確認された。しかし、各ヒーモリの製法と形態はそれぞれ異なっている。ジェル・ヒーモリとは、大オボーのジャラーから小オボーのジャラーまで結界する注連縄のことである。この細長い注連縄に五つ色（青、白、赤、緑、黄）の三角形の絹垂を垂れ下げる。この五つの色に関して、青色が天、白色が雲、赤色が火、緑色が草（植物）、黄色が大地をそれぞれ象徴している。オボー祭りの際、五つの色で飾ったジェル・ヒーモリを結界することにより、天の神、雲の神、火の神、草の神、大地の神が祭りの聖地であるオボーに一堂に光臨され、祭りの供物を味わい再び戻って行くと考えられる。地元の長老にインタビューをしたところ、オボー祭りのその日だけに、オボーの神霊が訪れてくるという。他の日は殆どよその世界を回っているという。この意味でオボーは正しく神霊の饗筵であり、それが五つの色からなる象徴性の濃いジェル・ヒーモリの結界によってより具現化されていることになる。共同体の成員もその聖なる領域のもと、連帯感を強め長く繁栄するための新たな局面を迎えるのである。ブス・ヒーモリとは、三色（青、白、黄）のハダグ（幣）のヒーモリ及び布（絹）に馬の絵や形代、馬と猛獣、仏具、チベット経文などを印した

絵馬のことを指す。[写真 13, 14]。チャーサン・ヒーモリとは紙に馬の絵を印した絵馬のことを指す。主に風に飛ばし、精神の高揚、気運の興盛を祈念し象徴する。

オボー祭りの際、ヒーモリと呼ばれる注連縄や絹・紙の絵馬を飾りつけることは、神霊が降臨する斎場の荘厳具の奉りでもあり、これによってオボーの外観が威風を増し、祭りが厳かな雰囲気の中に営まれ、参拝者の気分が昂揚される。そこにモンゴル人の独自の伝統と象徴的意味が啓示されている。こうした具体的・象徴的体系の示唆を「総合的直観と人間精神の本質的傾向に関する認識をもとに、対象の内的意味すなわち象徴的価値の世界を解明する」[宮家 1995(1989):240]という理論の流れでより正確に捉えることが可能であろう。

### 2-3-8 小オボー

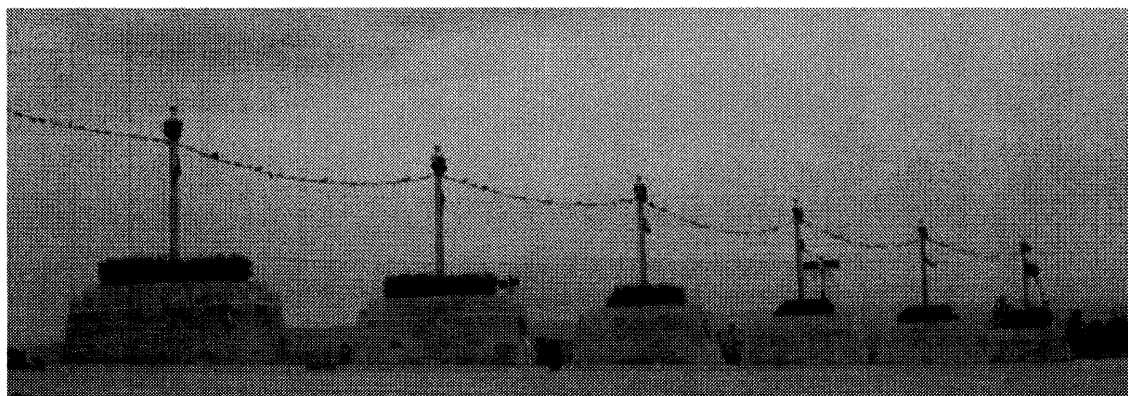


写真 15 エルデニ・オボーの小オボー



写真 16 トラガ・オボーの小オボー

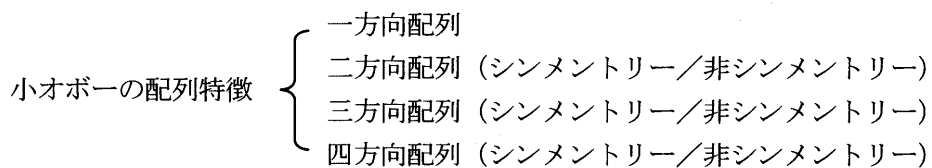
小オボーは大オボーより小さく、そしてその造営も簡素である。筆者が調査をした 19 基のオボーの中、17 基オボーの小オボーが石を積み形できている。従ってオボーの構造や特徴によって各小オボーの配列方向や数も異なる [図 1, 2]。図 1 と 2 は一群系オボーと数群系オボーの平面図である。

エルデニ・オボーの小オボーは 12 個である。その特徴は東西方向配列でそれぞれ 6 個のシンメントリー型である。エルデニ・オボーの中心オボーと各小オボーはそれぞれ一ソム®を代表

しているという。そのソムの名前を左から挙げると：①バガゴル・ソムのオボー、②イフゴル・ソムのオボー、③バヤンフレ・バローン・ソムのオボー、④バヤンフレ・ジューン・ソムのオボー、⑤ヤルネ・ジサのオボー、⑥ゲゲン・サンのオボー、⑦ゴル・ホショー・オボー、⑧チョイル・ジサのオボー、⑨ホワーゴド・バローン・ソムのオボー、⑩ホワーゴド・ジューン・ソムのオボー、⑪アルール・ソムのオボー、⑫タイジナルのオボー、⑬チョホル・ソムのオボ一等である<sup>⑩</sup>。

「オボーの基数は共同体の組織の数と同じくする場合がある」[Sayinčoytu. W 1998:442]。上記のエルデニ・オボーの場合、⑦番の「ゴル・ホショー・オボー」は「中央旗オボー」を意味し、即ち同オボーはかつて「ホショー・オボー」、つまり旗オボーであることを表わすものである。従って、数多くのオボーの小オボーの配列、数やその意味役割等はまた謎に包まれている。筆者は調査した 19 基オボーを分析してみると、小オボーのないオボーが 3 基、小オボーが偶数であるのが 12 基、奇数であるのが 4 基存在した。そして所謂 13 オボーが最も多く 6 基あった。全体の総数において、偶数が 13 基、奇数が 6 基あった〔表 3〕。このようなデータに基づき、小オボーの配列メカニズムを下記のような図式で表わすことを試みた。

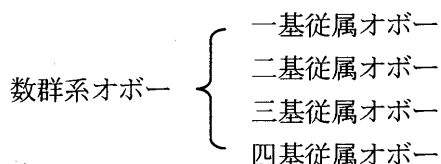
図式 2



### 2-3-9 従属オボー

従属オボーとは、数群系オボーを形成している各独立系オボーと一群系オボーのことを指している。西ウジムチン旗を代表するバヤン・ホショー・オボーは二基の従属オボーで構成されている。数群系オボーによって、従属オボーの名称、構成、配列方向等が異なる。筆者は 7 基の数群系オボーを観察した。観察データを分析した結果、従属オボーの配列やその方向に綿密な一様性が内包されていたことが確認された。それらの数群系オボーの構成メカニズムを下記のような図式で示すことを試みる。

図式 3



従って従属オボーの配列位置は、基本的に中心の一群オボーの東南、西南、東北、西南東南、西南東北であることが確認された。従属オボーの造営目的やその機能役割に関してまた精確なデータや情報を把握していないが、そのオボーの名称には大変興味深い意味が内包されていることが分かる。それを表 4 のようにデータ化して分析を試みた。データの中の各従属オボーの

名称を見ると「子供・オボー」、「お父さん・オボー」、「お母さん・オボー」、「羊飼いのオボー」、「力士のオボー」、「聖山のオボー」、「肥満のオボー」、「宝石のオボー」、「轆のオボー」、「活仏の墳墓のオボー」などの多様にわたっている〔表4〕。これらの興味深い名称にその従属オボーの目的や機能が託されている可能性が高いと考えられる。

「子供のオボーは、子供の健康を祈願する目的、あるいは子供を望む親たちのために造営されたと考えられる。また共同体の子供たちの生命を再生化させた結果できたとも受け止められる」〔Sayinčoytu.W 1998:443〕。「子供のオボーは子供の生命を祈願し、子供に恵まれない親が子を授けた後、その土地を記念するため祭ったオボーである。子供のオボーは山の洞窟や路の交差する所に造られる。子供のオボーには、北斗七星を奉ることがある。モンゴル国のハルハ河の辺のワンギン・チャガン・オーラ(王の白頭山)の頂上に子供のオボーを築き、子授けの祈願を行っていた」〔Sayinjiryal 1999:429〕。確かにモンゴルでは医療が行き届いていない時代、新生児の死亡率が高かった。また子宝に恵まれない夫婦も多かった。子供のオボーは、そうした現状を克服するための共同体及び人々の子供に対する認識、願望を反映するものと考えられる。「共同体における縁の基本は、なによりまず同じ土地に居住しているという土に関した地縁である」〔宮家 1995(1989):319〕。子供のオボーの存在はこうした「地縁」の強化にも聖なる力を持たされるものである。

### 3 配置形態

オボーは実に複雑な構成を持つ造営物である。その空間的配置の構成形態の特徴から、独立系、一群系、数群系オボーの三つの類型に分類されることが可能である。特に数群で一基のオボーを形成するオボーのことは難しく、その地域及びその周辺に住む者ではないと正確に把握することは到底できないものである。

#### 3-1 独立系

一基だけのオボーから成るオボーのことを独立オボーと言う。従って、構造的にこうした特徴を有するオボーはつまり独立系オボーに属する。著者は2004年のウジムチン地域での集中調査中、二基の独立オボーに追跡、参与調査を行なった。独立系オボーの造営方法、祭祀等は他の系列のオボーと基本的同様である〔図1のNo.1、2は独立オボーの平面図である〕。

#### 3-2 一群系

一基の大オボーと幾つかの小オボーで構成されているオボーのことを一群オボーという。一群オボーの特徴は、先ず一基の大きいオボーがあり、その周辺に、同形の小さいオボーが一定の基準で配置されることである。従って、このような特徴を持つオボーはつまり、一群系オボーに属する〔図1のNo.3-11は一群系オボーの平面図である〕。

図1 独立系オボアと一群系オボアの平面図と構成特徴

No	オボアの平面図(空間的構造)	名称及び構成特徴
1		ヒーモリト・オボアの平面図 小オボアのない1基の独立オボア
2		バグシ・オボアの平面図 小オボアのない1基の独立オボア 西南約40mのところ巨樹を祭る
3		ラテン・オボアの平面図 小オボアは二方向配列の東西 シンメントリー型；東西各6、計13基
4		エルデニ・オボアの平面図 小オボアは二方向配列の東西 シンメントリー型；東西各6、計13基
5		ワンガイン・オボアの平面図 小オボアは二方向配列の東西 シンメントリー型；東西各6、計13基
6		バチ・オボアの平面図 小オボアは二方向配列の東西 シンメントリー型；東西各5、計13基
7		ハラワート・オボアの平面図 小オボアは一方向配列の西北型；計13基
8		ゴルハン・ハン・オボアの平面図 小オボアは三方向配列の東西・東南非 シンメントリー型；西12、東17、東南2、 計32基
9		サグライ・オボアの平面図 小オボアは三方向配列の南北・東南非 シンメントリー型；南3、東南1、北4、 計9基
10		ドゥレンザーン・オボアの平面図 小オボアは二方向配列の西南・東北 シンメントリー型；各3、計7基
11		パヤンエルヘト・オボアの平面 小オボアは四方向配列の東西南北 シンメントリー型；各13；計53基

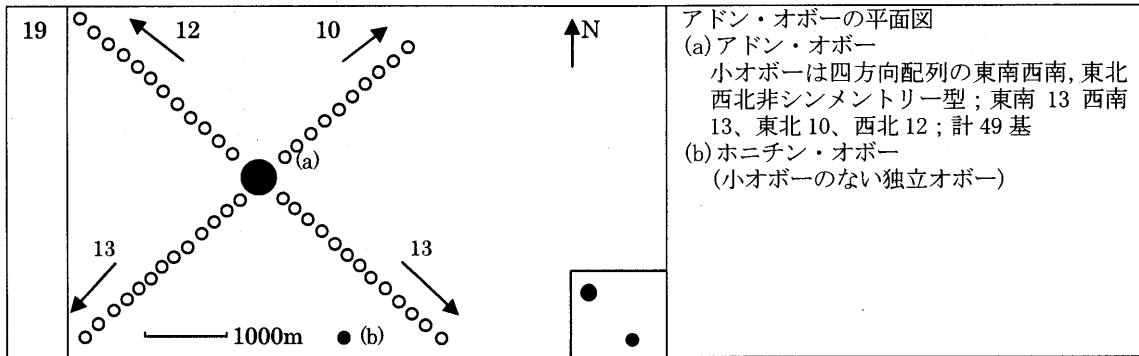
3-3 数群系

数群系オボとは幾つかの独立系オボと一群系オボで構成されているオボのことを指す。数群系オボの特徴は、中心となる一群系オボが造営され、その周辺の3km以内の所にまた新たに幾つかの小規模の従属的な関係の独立系オボと一群系オボが造営されていることである。ウジムチン地域では数群系オボは数多く点在している。筆者が調査した数群系オボの平面図と空間的配置構成の特徴を下記の図にまとめる。

図2 数群系オボの平面図と構成特徴

No	数群系オボの平面図(空間的構造)	名称及び構成特徴
12		ハルガイト・オボの平面図 (a) ハラガイト・オボ 小オボは二方向配列の東西シンメトリー型；東西各4、計9基 (b) フヘッド・オボ (小オボない)
13		ホショー・オボの平面図 (a) ホショー・オボ 小オボは二方向配列の東西非シンメトリー型；東9、西8；計18基 (b) ブーフイン・オボ
14		ホンゴル・オボの平面図 (a) ホンゴル・オボ 小オボは四方向配列の東西南北シンメトリー型；東西各6、南北2、計15基 (b) ハイラハン・オボ
15		バヤン・ホショー・オボの平面図 (a) バヤン・ホショー・オボ 小オボは三方向配列の東西北非シンメトリー型；右6、左7、北1、計15基 (b) アーブ・オボ 小オボは二方向配列の東西シンメトリー型；東西各5、計11基 (c) エージ・オボ 小オボは一方向配列の東南型；計2基
16		トラガ・オボの平面図 (a) トラガ・オボ 小オボは二方向配列の東西シンメトリー型；東西各6、計13基 (b) ガジル・オボ (別称チンダモニ・オボ) (c) アラル・オボ (d) シャラル・オボ
17		バヤン・オボの平面図 (a) バヤン・オボ 小オボは三方向配列の東西北非シンメトリー型；西12、西南1、東15；計29基 (b) タルガン・オボ 小オボは二方向配列の東西シンメトリー型；東西各15、計31基 (c) エージ・オボ (小オボがない)
18		ボラグ・ハン・オボの平面図 (a) ボラグ・ハン・オボ (b) エルデニ・ジェフルガチ・オボ (c) シリン・セン・エルイン・オボ (d) ホラガイチイン・オボ (e) ジェヒルガチ・オボ いずれのオボも独立オボである。

オボアの造営に関する基礎的諸考察 (オルトナスト)



〔図1、2は筆者作成〕

表1 集中調査を実施したオボアのデータの集約〔表中の空白箇所は未詳〕

No	オボアの名称	構成形態	所在地域 (旗・ソム・ガチャ)	祭祀日 (陰暦)	主宰形態	取組力士	出場 競馬数
1	ヒーモリト・オボア	単一	バチ・ソム・バヤンチェドム	5/26	個人 2名	64名	約 30
2	バグシン・オボア	単一	オラーンハラガソム	8/2	寺廟		
3	ラテン・オボア	単一	オラーンハラガソム	8/2	寺廟		
4	エルデニ・オボア	単一	シリントホト市	5/13	市	128名	
5	ワンガイ・オボア	単一	バヤンオーラ・バラガソ	5/15			
6	バチ・オボア	単一	バチソム・バチ	5/20	個人 4名	128名	約 40
7	ハルワート・オボア	単一	バチ・ソム・ダブシラト	6/25	特定個人	無	無
8	ゴロハン・ハン・オボア	単一	ゴルハン・タルバイ	5/21	個人 8名	128名	約 30
9	サグライ・オボア	単一	東ウジムチン	6/18	個人		
10	ドゥレンザーン・オボア	単一	バヤンオーラ・バラガソ	5/10	個人	128名	
11	バヤンエルヘト・オボア	単一	オラーンハラガソム	5月第一 週火曜日	寺廟	128名	約 30
12	ハラガイト・オボア	複合	オラーンハラガソム	5/13	寺廟	64名	約 20
13	ホショー・オボア	複合	アルタンゴル・ソム	6/25	ソム	128名	約 40
14	ホンゴル・オボア	複合	東ウジムチン・ドートノール ソム	6/20	共同 4名・寺		
15	バヤン・ホショー・オボア	複合	バヤン・ホショーソム・バヤ ンチャガンガチャ	5/19	個人 10名	128名	約 50
16	トラガ・オボア	複合	ゴルハン・タルバイ	5/22	個人 6名	64名	約 20
17	バヤン・オボア	複合	東ウジムチン	6/3	個人 15名	128名	
18	ボラグ・ハン・オボア	複合	ハンオーラ・ソム	5/11	個人	128名	約 30
19	アドン・オボア	複合	バチ・ソム・ダブシラト	4/16	個人 4名	128名	約 30

表2 大オボアの構成特徴と立地条件

No	オボアの名称	立地	構成・形状	台座	径	高さ	宝珠柱	祠	香台	祭壇
1	ヒーモリト・オボア	山頂	石積み・円柱形	無	3m	1m	無	無	無	無
2	バグシン・オボア	砂漠の中	石積み・円錐形	無	5m	2m	無	無	有	無
3	ラテン・オボア	丘の麓	石垣・土塗り	無	1.5m	2m	無	無	有	無
4	エルデニ・オボア	丘上	石垣・円柱形	2段	6m	2m	有	無	有	有
5	ワンガイ・オボア	山頂	石垣・円柱形	無	6m	2m	有	無	無	無
6	バチ・オボア	山頂	石積み・円錐形	1段	7m	1m	有	無	有	有
7	ハルワート・オボア	山頂	石積み・円錐形	無	4m	1m	無	無	無	無
8	ゴロハン・ハン・オボア	山頂	石開い・円柱立	無	6m	1.5m	有	有	有	有
9	サグライ・オボア	路傍	石積み・円錐形	無	4m	1m	有	無	無	無
10	ドゥレンザーン・オボア	山頂	石積み・円錐形	無	4m	1.5m	有	無	有	有
11	バヤンエルヘト・オボア	丘上	石垣・土塗り	無	4m	1.5m	有	無	有	無
12	ハラガイト・オボア	山頂	石垣・白亜塗り	無	4m	1.5m	有	無	有	有
13	ホショー・オボア	山頂	石垣・白亜塗り	無	3m	1.5m	有	無	有	有
14	ホンゴル・オボア	丘上	石垣・円柱形	無	4m	1.5m	有	無	有	有
15	バヤン・ホショー・オボア	山頂	煉瓦壁・円柱形	2段	5m	2m	有	無	有	有
16	トラガ・オボア	山頂	石台・煉瓦開い	1段	7m	1.5m	有	有	有	有
17	バヤン・オボア	山頂	石積み・円柱形	無	7m	1m	有	無	有	有
18	ボラグ・ハン・オボア	断崖上	石積み・円錐形	無	3m	1m	無	無	有	有
19	アドン・オボア	山頂	石垣・白亜塗り	1段	4m	2m	有	無	有	有

表3 一基オボーの基台の比較 [No 順は図1、2、表1、2と同じ]

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
小オボー	0	0	12	12	12	12	12	31	7	6	52	8	17	14	24	12	57	0	48
従属オボー											1	1	1	2	3	2	4	4	1
基台	1	1	13	13	13	13	13	32	9	7	53	10	19	16	28	16	61	5	50

表4 数群系オボーの各従属オボーの名称とその意味

番号	1	2	3	4	5	6	7
中心的な 一群オボー	アドン・ オボー	ハラガイト・ オボー	ホシヨー・ オボー	ホンゴル・ オボー	バヤン・ホシ ヨー・オボー	バヤン・ オボー	トラガ・ オボー
意味	馬の	イラクサの	旗の	尊いの	豊かな旗の	豊富の	五徳の
一基目の 従属オボー	ホニチン・ オボー	フヘド・ オボー	ブフ・ オボー	ハイラハン・ オボー	アープ・ オボー	タルガン・ オボー	チンダモニ・ オボー
意味	羊飼いの	子供の	力士の	聖山の	お父さんの	肥満の	如意宝石の
二基目の 従属オボー					エージ・ オボー	エージ・ オボー	アラル・ オボー
意味					お母さんの	お母さんの	轅の
三基目の 従属オボー							シャラル・ オボー
意味							活仏の糞棒の

[表1、2、3、4は筆者作成]

#### 4 まとめ

オボーはモンゴルの祭祀文化の原型でありながら、その真相は学界から見落とされ研究が後回しにされている学問分野の一つであると言えよう。そこには幾つかの諸要因が潜むと考えられる。一つ目は、オボーは宗教性の強い行事。二つ目は、オボーは地域性、氏族性の強い行事のため、排外的傾向（ショーヴィニズム）が顕著。三つ目は、厳しい禁忌があること。数多くのオボーには、未だに女性は登ってはいけない、他の集団の者は登ってはいけない、参拝していない者は登ってはいけないという相手に対する畏怖の念を抱かせるイメージが優勢を占めている。そのため、外国人の研究者は勿論、現地の者さえ気が向くままに色々なオボーを立ち回することは敬遠されている。故にオボーの全貌解明的な研究は勿論、正確な情報や認識さえ不十分であり、それが今日のオボー研究の学界から立ち遅れている一因に繋がったと指摘されよう。しかし、モンゴルのオボーは複雑かつ多重構造と多様な構成を持ち、綿密な秩序と奥床しい仕来りのもとで人気の稀な場所に建てられ祭祀が営まれる造営物である。そのため今後は民族学的、人類学的視点からの研究と考察が必要である。本稿はこうした視点に立脚し集中調査のデータに基づいてまとめたものである。

「共同体の宗教の基盤をなしているのは、地縁・血縁を契機に結びついている人々が自分たちの生活上の必要から生み出した生活習慣ともいえる民俗宗教である。この共同体の民俗宗教は宗教施設やそこにおさめられる崇拝対象や祭具、これらを包括する風景、年中行事、人生儀礼・俗信、神話・伝説・昔話などから構成されている。そして、その根底に共同体における人々の社会関係、生活を自然的・超自然的なものを含む宇宙のあり方に位置づけて説明する世界観を内在させている。それゆえ共同体の民俗宗教は、地縁・血縁などの共同体のきずなを維持し、人々の現世における生活の守護をはるか機能を果たしているのである」[宮家1995(1989):322]。オボーは遊牧民の自然観と歴史的背景に合致した宗教的施設であり、共通の崇拝の対象でもある。オボーの構造、配置形態やその祭祀を通して、オボーが配置される共

同体との関係の諸相が提示され、更に遊牧民の世界観の抽出することに大きな意味を齎すものと考えられる。

(ぼるじぎん・おるとなすと 本学研究科博士後期課程)

注：

- ① 盟 (アイマグ)、旗 (ホシヨ) は内モンゴル自治区の行政区画の名称でアイマグ、ホシヨのことを指す。盟の下に旗がいる。
- ② 期間中筆者は計 19 基のオボを調査した。うち 8 基 [表 1 の No1, 4, 6, 8, 13, 14, 15, 16] のオボ祭りを実際に見聞し、その他のオボに関して追跡調査を行なった。
- ③ 「オボ」の表記に関して、戦前戦後の日本人の研究者の間に異なる表記が見られる。即ち、鳥居龍蔵 [1975 (1928): 324]、江上波夫 [1956: 163]、後藤富男 [1956: 163] は「オボ」という表記を用い、辻雄二 [1994] 等は「オボー」という表記を用いている。従って、本稿では、モンゴル語の正確な発音に基づき「オボー」という表記を用いた。しかし、本稿で参考および引用した先行研究での「オボ」と表記している箇所をそのままに引用した。
- ④ シリング盟の中心都市。盟の庁舎ははじめ教育、交通、情報、産業が集中している。
- ⑤ エルデニは「宝」の意味。当オボの祭祀は 1957 年に停止され、オボも破壊されていた。そしてオボの跡地に人民解放軍の高さ約 10m も超える巨大な記念碑が建てられていた 2004 年に記念碑が他の場所に移され、エルデニ・オボが新たに築造され盛大な祭りが催された。祭祀日は陰暦 5 月 13 日である。実に 47 年ぶりの快挙である。
- ⑥ 宮家 1995 (1989) 『宗教民族学』 東京：東京大学出版会 p. 225。
- ⑦ マライン・ヘシグ (mal-un kešig、家畜の恵み)：マライン・ヘシグとは家畜の恵みの意味で、ウジムチン地域では特に家畜をよそに売買する時や或いは何らかの目的で他人に上げるとき、その家畜の尾毛から筆で取ることもある。この毛をその家畜の恵みとして大切に残し、保管する習慣がある。そうしないと家畜の福がよそに逃げてしまうという概念がある。オボの築造にあたり、シュンシグ・ダラフ儀礼にも呪具として家畜の毛を入れていることは、家畜を大切に繁殖させたいと願う遊牧民の認識の表れであるだろう。
- ⑧ オンゴン：モンゴル語におけるオンゴンという言葉は多義語である。①神聖な、穢れのない。②墳墓。③オボに聖別する家畜の首につける五 (地域によって三) 色の布切れでできた護符を指す。またシャーマンが脱魂状態に入ることをオンゴド・オロシフ (ongyod orošiqu) と言う。この場合のオンゴドはオンゴンの複合語である。
- ⑨ 新スム：1745 年建立される。別名はニョーツ・タリニ・マシダ・デルゲレセン・スム (niyuča tarini mašida delgeregsen süm-e、撥暗法輪時)。1966 年破壊を受け、1986 年修復される。現在東ウジムチン旗の東約 100km の所に位置し、60 名あまりの僧侶が修行を行っている。
- ⑩ 1984 年内モンゴルのオランチャブ盟のバヤン・ホシヨ・オボ祭りを観察した大塚は、擬宝珠の直下に飾られている幢のことを「シャンバ」と呼んでいる。この「シャンバ」の意味を辞書で調べても見当たらないが、多分現地の言葉の発音であろう。
- ⑪ ソム：ホシヨ (旗) の下に置かれる行政機関。
- ⑫ Šilin qota yin soyol teüken material (2). (『錫林浩特市政协文史史料 (2)』 (内部資料)). (dotuyadu keblel). 1997 pp. 73—74.

参考文献

和文文献

江上波夫

1956 「オボ」『世界歴史事典』第二巻 東京：平凡社 pp. 163—164

大塚克義

1984 「中国・内モンゴル自治区モンゴル族のオボ祭りと牧畜」『えとのす』23号 新日本教育図書株式会社 pp. 1—25

後藤 富男

1956 「モンゴル族におけるオボの崇拜—その文化における諸機能」『民族学研究』19:3-4 pp. 47—71

佐野賢治

1988 「十三塚と十三オボ」『日本民俗の伝統と創造』 東京：弘文堂 pp. 281—306

白鳥庫吉

1970(1912) 「幢竿に就いて」『白鳥庫吉全集 第3巻』東京：岩波書店 p. 504

1970(1936) 「満鮮に於ける竿木崇拜」『白鳥庫吉全集 第3巻』岩波書店 pp. 504—510

辻雄二

1994 「オボ—信仰再考 — 東アジア民間信仰理解における一試論 — 」『史鏡』歴史人類学会 29号 pp. 136—152

宮家準

1995(1989) 『宗教民族学』 東京：東京大学出版会

森田勇造

1986 「天神に祈るオボ祭」『チンギス・ハンの末裔たち』東京：講談社 pp. 58—66

護雅夫

1956 「匈奴」『世界歴史事典』第二巻 東京：平凡社 pp. 749—753

モンゴル語の文献[モンゴル語のアルファベット順]

Arbinbayar, Sunum

2001 Otoy-un obuy-a orod. (『オトグ地域のオボ—』). Öbür mongyol-un yeke suryayuli-yin keblel-un qoriy-a Kökeqota. p. 8

Qurčabayator. L., Üjim-e. Č.

1991 Mongyol-un böge mörgül-un daiy-a taqily-a -yin soyol. (『モンゴルのシャーマニズムの祭祀文化』). Öbür mongyol-un suryan kümüjil-un keblel-un qoriy-a Qayilar

Sayinjiryal

1999 Obuyan takly-a. (『オボ—祭り』). Mongyol jang üyil-e-yin nebterkei toli (oyon-u bodi) Öbür mongyol-un sinjilekü uqayan tegnig mergejil-un keblel-un qoriy-a. Ulayanqada. p. 986

2001 Mongyol takly-a, (『モンゴルの祭祀』) Ündesten nu keblel un qoriy-a .Begejing. p. 446

Sayinčoytu. W

2004 Ele baiyča-du sayuqu-yin yosun. (『モンゴル遊牧文化の景観』). Öbür mongyol-un arad-un keblel-un qoriy-a Kökeqota. .

1998 Ami-yin šitülge, (degedü, dooradü). (『アニミズム』上下). Öbür mongyol-un arad-un keblel-un qoriy-a Kökeqota.

Šaraldai, Saiynjiryal

1983 Altan ordun-u daiyly-a. (『黄金の宮の祭祀』). Ündesten-u keblel-un qoriy-a .Begejing.

Qu yuan

2002 Mongyolčud-un obuyan taqily-a. (『モンゴル族のオボ—祭り』). Öbür mongyol-un bayši-yin yeke suryayuli. p. 12